消防車両の緊急走行

消防車両がサイレンを鳴らし、赤色灯を回して緊急走行するのは、火災以外にも以下のような場合があります。

○支援出動（救急支援、ヘリ支援など）
○救助出動（交通事故、水難事故など）
○警戒出動（油などの漏れ、災害警戒など）

救急車以外の消防車両が緊急走行する場合には、市ホームページや消防情報案内（0180-955-911）でお知らせします。

消防技術の向上を目的に開催される操法大会。
厳しい訓練を積み重ね大会に臨みます

消防団のなりたちは町火消しから

消防団の歴史は古く、時代劇などによく出てくる江戸時代の自衛、自治の考えに基づく「町火消し」が今日の消防団の前身であるといわれています。

これが明治時代になると「消防組」となり、昭和の戦時中には、警察の補助機関として「警防団」に、そして戦後、警察から分離し、自主的で民主的な「消防団」として再出発し、今日に至っています。

「自分の住むまちは、自分たちで守る」という「町火消し」の精神は、現在も消防団に受け継がれています。

自らが主役になる防災活動の大切さ

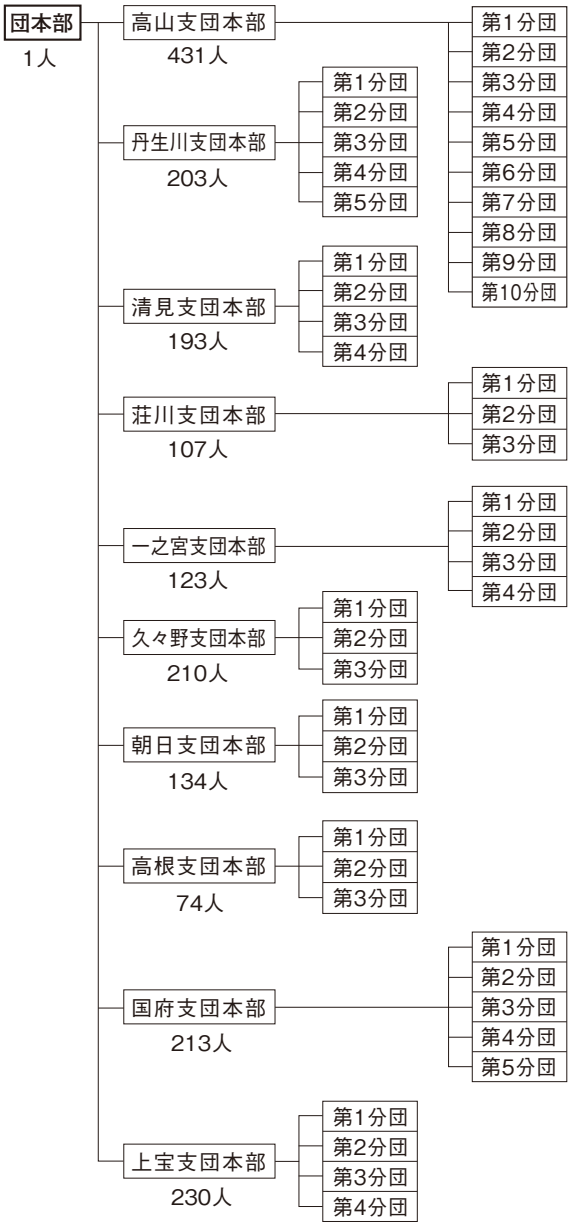
中越沖地震や岩手・宮城内陸地震は私たちの記憶に新しいところですが、地震、台風、豪雨など、自然災害は避けることができません。いつ発生してもおかしくないといわれる東海地震では、阪神・淡路大震災を上回る被害が想定されています。

こうした災害に対応するためには、地域の防災力を高めていくことが非常に重要です。

阪神・淡路大震災では、一時的に10万人以上が生き埋めになり、約3万5千人が自力で脱出ができなくなりました。地域に密着した消防団は、日ごろの活動を生かして、自主防災組織や地域住民とともにこのうちの約8割を救出するめざましい活躍を見せました。

災害が大きくなれば大きくなるほど、災害発生直後の地域住民の助け合いや人命救助、初期消火への取組みが被害の軽減につながります。阪神・淡路大震災において消防団や近隣住民によって救助された被災者の生存率が80％超と、非常に高い割合を示していることがそれを証明しています。

高山市消防団の組織概要



平成20年4月1日現在